

父も、同年代の多くの方々と同じように、自分の時間があるうちに、どうしても伝えておきたいことを書きとめたのだと思います。

◆ 母の話

母からは、広島原爆の日話を、繰り返し聞かされていました。

それまで広島は空襲が少なく、「どうしてだろう」と話し合っていたのですが、少しでも安全にということで、母は祖父と一緒に郊外に住まいを移していました。8月6日は広島へ行くことにしていましたが、洗濯をした祖父の一つしかないズボンがなかなか乾かず、出発が遅くなりました。そこへ、広島の方角からドーンという聞こえ、後にキノコ雲とよばれた雲が立ち上るのが見えました。これはただごとではないと、広島行きを中止して様子を見ることにしました。

午後になると、広島の方から、焼けた人がつぎつぎと逃げてきました。学校などを救護所にして収容しましたが、医薬品もなく、十分な手当をすることはできません。やけどをした人たちはつぎつぎに亡くなっていきました。夏のことで、生きている人の傷口には蛆がわくようになりました。それを箸でつまんでとってあげることぐらいしか、できることはありませんでした。

◆ 海外で聞く戦争

海外に住むと、その国の人々の目で戦争を見ることになります。例えば、アメリカの学校で太平洋戦争のことを学習する時、授業の進め方によっては日本人の生徒がつらい思いをするかもしれません。しかし、それは、個人と国家の関係や世界の現実を理解するためには有益な経験となり得るでしょう。逆に、ある帰国生は、パールハーバーが話題になる日なのでどきどきしながら教室に行ったが、歴史を科学的に、公平に見ようとすると同級生や先生の姿勢に感銘を受けたと言っていました。

アメリカは、太平洋戦争の後も、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争などを戦っています。今でも、イラクやアフガニスタンでは多くのアメリカ人が戦争のただ中にあります。戦争がニュースになることも多いし、戦争についてのいろいろな考えが表現され、支持か反対かで議論になったり、デモが行われたりすることもめずらしくありません。友だちの親が戦場にいる場合もありますし、高校生の年齢になると、自分に兵役についての通知が届くこともあります。つい最近も、イラクから帰還した兵士たちの中に、仕事に就けずホームレスの状態になった人が数多くいることが報じられていました。アメリカでは、戦争は過去の出来事ではありません。日本人の生徒たちが、戦争につ



啓明学園の「国際理解」の授業

いてなんらかの考えを表明することを迫られるようなことも起こります。この生徒たちは、戦争と平和を考えるために、非常に貴重な体験をしていると言えます。

◆ 学ぶ機会の大切さ

私がアメリカの学校に勤めていたとき、生徒と保護者たちを広島に案内したことがあります。参加者たちは、原爆資料館の展示を長い時間をかけて見学し、録画され英語の字幕がついた被爆者の話に聞き入っていました。歴史的な出来事が起きた場所を訪れたり、残された遺物を見たりすることも大切な学習です。

啓明学園では、毎年9月1日に「平和の日礼拝」を行って、平和の意味を考えさせます。私たちが学習する目的の一つは、歴史に学び、過去の過ちを繰り返さないことです。過去の出来事をいろいろな角度から検証し、いろいろな立場の人たちと話し合い、柔軟に考えることができる人たちを育てていかなければなりません。その意味でも、帰国生に期待を寄せたいのは、私だけではないでしょう。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
TEL : 042-541-1003
HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp



日本人達にとっては戦争は「記憶」ですが、アメリカ国民にとっては「現実」です。私自身、パキスタンの戦場から一時帰郷した19歳の米軍兵士と2時間の空の旅をしたことがあります。

第二次大戦の日本軍の奇襲攻撃や米軍の原爆投下についてのアメリカの学校でのディスカッションの経験を通して、海外・帰国生たちが、世界の紛争に対して多様な視点から物事を考え判断できる大人に育って欲しい。佐々先生のその「期待」に大賛成です。